シシが山から下りてくる
It come down from the mountain
守屋友樹
Moriya Yuki
2018年5月4日(金)－5月20日(日) 11:00-19:00
金曜日20:00まで / 月曜日休館
Gallery PARC

協力:東京アーティスツ・プレイスメント・サービス(HAPS)

KG+

作家テキスト

六甲山の麓には山からイノシシが下りてくる。2016年に六甲の団地を襲う機会があり、下見を兼ねて六甲周辺を散策していると、至る所にイノシシが掘かれた痕板を見つけた。僕はその絵を見て数少ない神戸での記憶を思い出す。僕は、幼い頃に神戸市内で過ごした時期がある。今では当時の記憶はほとんど無く、数少ない記憶の一つにイノシシに遭遇した事がある。その情報を思い出しただけではあるが、看板を通して今も変わらずに神戸にイノシシが出ることを知った。僕にとって神戸の街並みは、山の中にすっぽりはめ込まれた街である。住宅街と言っても街の隣まで行けば落石防止のネットで行き止まりとなったり、橋のない深谷で道を迂回するなど、決して都市にも田舎とも言えない場所である。それこそ、その場所は自然と人為が折り重なった場所と言えるのではないだろうか。

六甲山は、古くから森林などの伐採や燃料材の確保などを繰り返して行くうちには荒廃していった過去がある。荒廃の結果、土砂災害を頻発させることとなり、明治以降に土砂災害対策で植林を施すことや治山事業が活発化していく。そして、1960年以降には山中に都市を作る開発が始まり現在の街並みへと繋がる。この一連の流れは、人の暮らしに必要とされた形で何度も調整された自然の形なのだろう。人為的自然ともいうべきなのだろうか、そして、人間が主体ではない自然とは何だろうか。それは、網目越しの彼方から突然現れるイノシシだ。彼らは、不意にやってくる、それでも開放な住宅街は、依然として関静なままだ。

ならば、人もイノシシもいない写真を見た時、僕はどんな思いをするのだろう。この場所で写ものは何があるのか。SNSで画像付きの投稿を見て、獣害を受けた地域を巡りながら写真を撮っていく事にした。撮った写真を見返して行くうちに、極端に視線が低い写真があることに気づいた。その低さは、生き物を彷徒させて自身で撮った身体ではないような違和感を感じさせる。斜面を歩く時、人は顔を正面に向けることはそうそう容易いことではなく思う。傾斜が厳しいほど、空を仰いでしまうが、或いは地面を見てしまうのではないだろうか。でないと、先も足元も見えずに歩くことが出来ずに無にしてしまうからだ。では、顔を水平垂直にした時どのように見えるのか。それは、写真で起きたように視線が低くなる。この瞬間、僕は地形によって影響を受けた視線があることを経験した。紛れもなくシャッターを押したのは自分ではあるが、地形にも手というものがあるとすれば、僕に手を沿わせた結果として視線を低く感じさせるのかもしれない。と同時に「偽が見た」という指標は「地形によって僕は見せられた」という指標へと変換が起きる。

ヴァルター・ベンヤミンの「写真小史」でこのような一節がある。「カメラに語りかける自然は眼に語りかける自然とは違う。その違いは、とりわけ、人間の意識に浸透された空間の代わりに、無意識に浸透された空間が現出することによる。」ベンヤミンに倣って言えば、地形が映像に影響を及ぼした結果、写真(自然と人為の視線が交錯する)として見る事が出来るのではないだろうか。

最近、知人の会話で、京都の平安神宮に現れたイノシシは二条城まで走り、外堀に飛び込み命果てたという話を聞いた。

2018.5
守屋友樹

作家略歴 c.v

守屋友樹 Moriya Yuki

1987年東京都生まれ。2010年日本大学藝術学部写真学科古典技法コース卒業。2012年京都造形芸術大学大学院 修士課程芸術表現専攻修了。主な展覧会に「未来の途中の星 展 美術・工芸・デザインの新鋭9人展」(2017年、京都工芸繊維大学美術工芸資料館)、個展「"still untitled & a women S"」(2016年、KYOTO ART HOSTEL Kumagusuku/京都)、個展「gone the mountain / turn up the stone:消えた山、現れた石」(2015年、Gallery PARC)、「ARTIST WORK-SHOP @KCUA『The Catalogue』川内 倫子ワークショップ成果発表展」(2015年、京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA)、「TOKYO FRONTLINE PHOTO AWARD#4_NEWVISION#1」(2015年、G/P Gallery/東京)、「KUAD graduates under 30 selected」(2014年、Galerie Aube/京都)など、その他の活動に、演劇公演「石 | 溶けちゃってテレポート、固まってディレイ」(2016年、アトリエ劇研、和田ながらとの共作)など。

展示作品 works

2F

右(西宮市殿山町)
2018, inkjet print

左(神戸市東灘区本山町田辺ザフクケ原 天上川公園)
2018, inkjet print

真ん中(重)(神戸市東灘区岡本6丁目9-11)
2017, inkjet print

真ん中(下)(神戸市東灘区浜森台2丁目21 浦森会館内)
2017, inkjet print

(神戸市須磨区桜ヶ丘町16 桜ヶ丘町北公園)
2016, silver print,木材

袋(昇屋市西山町)
2018, inkjet print

3F

untitled(朗読:中平卓馬/風景への叛乱—見続ける面に火が…)
2018, 20min, 声:蓮原早奈美、鈴木康介、高橋みどり、前嶺紗季

4F

ロハバートペックトールみたいな(芦屋市六麓荘町)
2018, inkjet print

住宅地を眺める(兵庫県神戸市須区土山町13-21)
2018, inkjet print

映像(untitled)
2018, 20min

滝(神戸市須区水車新田)
2017, inkjet print

顔袋(untitled)
2018, inkjet print

真ん中(下)(神戸市東灘区住吉本町)
2017, inkjet print

第3(神戸市須区王子町3丁目)
2017, inkjet print

第2(神戸市須区王子町3丁目)
2017, inkjet print

第4(神戸市須区六甲山町)
2017, inkjet print

川(神戸市東灘区住吉山手1丁目)
2018, inkjet print

販売 プリント

展示作品を下記のサイズでリプリント販売いたします。
価格はシートのみ(税抜き)。
映像作品はいずれも非売。
「顔袋2」の作品のみ¥70,000.-(ed.5)になります。

7.01in ＝ ¥5,000.- / ed.5
15in ＝ ¥20,000.- / ed.5
23in ＝ ¥ 50,000.- / ed.5
48in ＝ ¥ 70,000.- / ed.5

展覧会について

2010年に日本大学芸術学部写真学科古典技法コース卒業、2012年に京都造形芸術大学大学院修士課程芸術表現研究科芸術表現コースを修了した守屋友樹(もりや・ゆうき/1987年・北海道生まれ)は、2017年「Still untitled & a women S」(KYOTO ART HOSTEL kumagusuku・京都)、2015年「消えた山、現れた石_ gone the mountain/turn up the stone」(Gallery PARC・京都)など個展に加え、多くのグループ展などによる写真・インスタレーション作品の発表、また京都を拠点に活動する演出家・和田ながらとのパフォーマンスユニット「守屋友樹と和田ながら」公演として、2016年の「石 | 溶けちゃってテレポート、固まってディレイ」(アトリエ劇研・京都)などの他、2017年の亀山トリエンナーレで「山と海に貼り付けた」(三重)、2018年のSICF19での「石 | 溶けちゃってテレポート、固まってディレイ」(青山スパイラル・東京)に参加するなど、写真表現を中心に精極的に活動の幅を広げています。

2017年の個展「Still Untitled / A Woman S」では、予測や研究がなされながらも、未だ噴火には至らない活火山での「フィールドワークの記録とともに、SNS上で見つけた知人のつぶやきを約一年に渡って追いかけた記録と、実際のスポットをひとりで運転台をわって展開。また、「未来の途中の星展・美術・工芸・デザインの新鋭9人展」(京都工芸繊維大学・京都)では、幼い頃に神戸で遭遇したイノシシの記憶を頼りに現地を知れと、現在でもイノシシが山から下りてくる場所を撮影した写真・映像で構成されました。これらは、近年の守屋のテーマである「写真における「サスペンス(未然の状態、無題の状態)」への考察を主眼に展開させられたもので、本展「シシが山から下りてくる:It come down from the mountain」は、この神戸・六甲山の麓に出没するイノシシを通ったプロジェクトをベースに、開発それ以降なくなった土地を入為的自然として、「**人間が主体ではない自然とは何か、それは、網目越しの彼方から突然現れるイノシシではないだろうか。**」という仮説を起点に、イノシシの存在(不在)を通して「都市/自然/身体」の横断を試みるものです。

山と住宅地の境目にある場所を取材した一枚の写真。これは「かつてイノシシが下りてきた場所」であり、「いま(撮影した時には)イノシシがいない(写っていない)場所」であり、また「いつかまたイノシシが下りてくるかもしれない場所」の写真と呼ぶことができます。しかしこの写真はそのものとして、それらをなにーつ決定しない、未知・未然が維持された状態にあるとも言えます。私たちは常に未知を既知で、未然を已然でもって解析、切り取ります。この一枚の写真は、時間・場所・歴史・経験・知識・記録・言葉など、「写真(に写るもの)の外」にいる観賞者との交わりによって生じる呼び名(視線)によって捉えられていると言えます。そうしていつしか無題の歌は題詠されたものとして読まれ、そこに受け取り可能な意味を固定化してしまいます。

本展において守屋は写真を過去の既知・已然に固定化したものではなく、過去と現在と未来において未だ意味の固定されることのないひとつの現の状態でもあることを示そうとしていると言います。そうして写真を「サスペンス」との緊張関係に置き直すことで、写真を見る・読む行為において、私たちの内に「わからないもの」を「わかるもの」にしようとするベクトルが常に働いていることを自覚させ、展示はその気づきを促す装置として鑑賞者に働きかけるのではないでしょうか。

Gallery PARC